



# センターコー ス



筑駒電子書籍文庫

けう

友樹は沖縄で開催されていたインターハイの会場にいた。

会場では大音量で「水夢」が流れ始め、男子100mバタフライ決勝を泳ぐ選手が入場している。一人一人の紹介が始まり会場に声援が響き渡る中で、友樹の目は一人の選手にくぎ付けになった。

センターコースの椅子にどっかりと腰かけ、プールを鋭い眼差しで見つめる屈強な男。友樹の小学生のころのライバルである智紀はそこにいた。昔のライバルの雄姿を見つめる友樹には不思議と嫉妬はなかった。それは少なくとも経過した時間によるものではなかった。これから友と共に闘うような高揚感に満たされた友樹の目は水に飛び込む友樹に釘付けになった。

神田智紀と安井友樹は同時期に杉並スイミングクラブに通い始めた。

二人とも水泳の練習にのめり込み、入ってから一年ほど経ち、ちょうど小学二年生になる時に選手コースに入会した。二人と同年齢の選手が他にいないことや、二人とも「トモ」と呼ばれて可愛がられたこともあり、二人はスイミングクラブにいるほとんどの時間を共に過ごす親友となった。そしていつの間にかS1も同じバタフライになっていた。

朝起きて学校に行き、友達と遊んでチャイムが鳴ったらすぐに帰る。家に帰ったらおにぎりを一つ頬張りすぐにクラブに向かう。クラブに着いたら一時間の陸トレをこなし、そこから二時間のスイム練習をこなし、練習が終わったら三〇分先輩と談笑をして帰る。家に帰ったらご飯を食べ、お風呂に入り、ストレッチをして一〇時には布団に入る。そんな決められたことを決められた時間にする小学生にはあまりにもつまらなすぎる生活を毎日送り、あっという間に時は過ぎていった。

「やったよ、智紀」

「おめでとう友樹」

男子一〇歳以下五〇メートルバタフライの最終レースの余韻が残るプールサイドで二人は抱き合った。

「すごいな友樹。ついにJ0切っちゃったね。」

友樹の3組前のレースで泳ぎ終わって、サブプールから急いで駆け付けた智紀は息を弾ませながら言った。

「ありがとう智紀。やったー。」

「夏も一緒に頑張ろうな、友樹。」

「ああ、うん。」

友樹は智紀にそっけなく返事をする、興奮してプールサイドまで下りてきた森コーチのもとへ駆け出して行った。智紀は友樹の背中を初めて見たような気がした。毎日自分と同じ生活をし、同じ練習をしてきた。それなのに年々二人の差は広がっていった。今まで智紀はそのことを特に気にも留めず普通に接してきた。しかし二人の明暗は今日はっきりと分かれた。その背中を見つめながら自分の心に今までに味わったことのない気持ちが生まれるのを感じた。いつも隣にいたはずの友樹が自分のはるか遠くに行ってしまったような言いようのない寂しさを感じた。

「おめでとう、友樹」

「すごいね～友樹君。期待の星だね。」

智紀がクールダウンを済ませてクラブチームの待機場所に戻ると、大きな人の輪ができていた。クラブの仲間や保護者が作る輪の中心には友樹がいて、周りからは友樹を称賛する声が次々と発せられていた。友樹は恥ずかしそうに頭をかきながら、それでも嬉しそうに周りの声に応えていた。

本来智紀が一番友樹のことを祝福するはずだった。しかし智紀はその場に立ち尽くしてしまった。今まで一番の仲間だった友樹が一番の敵に変わった。そして、初めてずっと親友だった友樹に「勝ちたい」と思った。

輪のすぐそばに立ち尽くしていた智紀に、人の輪から抜け出してきた友樹が声をかけた。

「一緒に帰ろうぜ、智紀。」

「そうだね。じゃあ、早く帰ろう。」

そんな気分じゃねえよ、と思いながらも智紀は子供ながらに努めて明るく振る舞った。

辰巳の扉から外に出ると、乾いた風がまだ乾ききっていない髪の毛に強く吹き付けた。辰巳駅に続く並木道の木々が微かに揺れ、歩く人々は皆ベンチコートを着込んでいた。

門を出てから駅に着くまで智紀は友樹の少し後ろを歩いた。いつも隣にいたから気がつかなかったが、友樹の体は選手コースに入った時よりも数段たくましくなっていた。そして、友樹の顔は夕日に照らされて、少し大人びて見えた。

「ねえ、智紀。僕すごいよね、やっぱり。やっと全国大会出れるんだよ。」

「うん。そうだね。」

いつもの自分なら「友樹はほんとすごいよ。」って言うのになぁと思いながら智紀は静かに答えた。

「お前も一緒に出られるようにこれからも頑張ろうな。」

「ああ、そうだな。」

智紀は激しい劣等感を感じ、適当に相槌を打った。木々を揺らす風はだんだん強くなっている。その後二人の間に気まずい沈黙が続いた。

「ちょっと急ごうか、友樹。」

「そうだね。寒いしね。」

二人は小走りで駅に向かった。

電車に乗ってからも二人の間の沈黙は続いた。二人ともしゃべりださないまま気がいたら吉祥寺駅に着いていた。何も考えなくても帰ってこられるぐらい何度も通ったんだよなあ、と智紀は改めて感じた。

「じゃあ、また明日な、智紀。」

「うん、じゃあね。また明日。」

智紀は改札のほうに歩いていく友樹をしばらく眺めた。

「明日…。よっしゃー。」

智紀は叫んだ。明日からは、スイミングクラブは戦いの場だ。友樹に絶対に勝つ、智紀は闘志を燃やした。学校帰りの高校生がひそひそ笑いながら智紀を見ていたが、今の智紀にはそれが全く気にならなかった。

次の日も智紀はいつもと同じように学校に行き、おにぎりを頬張り、午後四時にクラブに到着した。智紀がクラブに着くと、友樹が石段でトレーニングをしていた。その隣では森コーチがつきっきりで回数を数えている。今までに見たことのない光景だった。

「おいおい、友樹。そんなんじゃ全国で戦えねえよ。まじめにやれ」

「はい。すみません」

智紀はなぜ友樹と森コーチが個別の陸上トレーニングをしているのか疑問に思いつつドアを押して中に入った。中では練習を終えたのであろう髪を濡らした幼稚園生ぐらいの男の子たちがカードゲームをしている。そんないつもと変わらない光景を横目に見ながら更衣室に入ろうと受付の前を通ると、奥から他のコーチの枯れた声が聞こえてきた。

「安井今日から特別メニューなんだってな。」

「森コーチ気合入ってたもんな。たぶんこれからJ0まで安井につきっきりだろうな。」

「めんどくせえな。まあ、初めてJ0に行った教え子だもんな。そりゃかわいいわ。」

コーチたちはしゃべり終わると慌ててプールに入っていった。時計を見ると四時半になっていた。陸トレを始める時間だ。更衣室に荷物を置いて、智紀は陸トレをしに外に駆け出した。

智紀は一日経ち、忘れそうになっていた昨日の気持ちを思い出した。

外に出ると既に智紀の二個上の先輩の武田健太と榎本祐輔が陸トレをしていた。二人ともそこそこ速いがなかなかJ0を切れない、言ってみれば智紀と同じ境遇の人間だ。

「よう、智紀。」

陽気な健太が智紀に声をかけてきた。寡黙な智紀には少し苦手なタイプだ。

「友樹すごいよな。ついに切っちゃったな。」

「そうですね。すごいですよね。」

こいつにはプライドはないのかと思いつつも祐輔の言葉に対して智紀は丁寧に返事をした。

「メドレーも一個下の代がないからどうしようかと思ってたけど友樹がいるから安心だよな。J0出られるかもしんないな。」

祐輔と健太の会話を無視してアップをしていた智紀の耳に聞きなれない話題が飛び込んできた。智紀は咄嗟に健太に聞き返した。

「メドレーって何？」

「何じゃないだろ。メドレーはメドレーリレーに決まってるだろ。」

見当外れの返事をしている健太のことを無視して智紀は祐輔に聞いた。

「メドレーリレーに出るんですか？」

「ああそうだよ。この前の友樹のタイムを見て森コーチが決めたらしいんだ。だから、バツタは友樹で、ブレは俺、バックは健太で、フリーは選手がいないからお前になるだろうな。」

智紀はその時言いようのない絶望感に襲われた。友樹がリレーでバツタを泳ぐこと、そして自分が戦力としてではなく、頭数を合わせるためにリレーメンバーに入ったことももちろん悔しかった。しかし智紀にとって一番ショックだったのはフリーとしてリレーメンバーに入ることであった。これからフリーの練習が中心になりバツタの練習が減ることは目に見えていた。

バツタで友樹に勝ちたい。そのために誰よりもバツタの練習をする。そんな昨日の決意はすでに打ち砕かれていた。

友樹は生まれたころから活発でよく泣く赤ちゃんだった。両親は友達をいっぱい作って樹のように育ててほしいという思いから友樹と名付けた。

周りの子よりも這い這いを始めるのも、歩き始めるのも早かったから、両親はこの子は運動神経がいいのではないかと心のどこかで期待していた。

幼稚園に入ると、親の願いを知っているかのようにどんどん友達を作っていた。目があえばどんどん話しかけ、遊びに誘い、友達の輪を広げていった。

幼稚園に入って間もなく、いつの間にか友樹は幼稚園の子供たちの中心にいた。

そして、両親の期待はあたり、友樹は何をやらせても幼稚園で一番になる、運動神経抜群の子供だった。

そんな友樹に両親は野球を勧めた。

友樹の父義則は昔高校球児だった。母親の京子とは高校時代に知り合った。義則がエースで、京子は野球部のマネージャーだった。

義則は高校最後の夏、剛腕投手として初めて甲子園への切符を手にした。

地元のだれもが義則の甲子園での活躍を信じて疑わなかった。

甲子園出場を決めてから義則は、地元の人たちからの大きな期待を感じる日々を送った。

外を歩けばすれ違う人に声をかけられ、食べ物や飲み物などをくれる人や、サインを求めて近寄ってくる人などもいた。

そういう人たちに接するとき義則は全く嫌な顔をせずいつも笑顔を作った。

だから、京子を含む周りの人間たちは、義則が自ら望む充実した人生を送っているものだと思い込んでいた。

そんな中、大会を一週間後に控えた練習中に義則の体に異常が起こった。肘を疲労骨折していて、ボールを投げられるような状態ではなかった。周りの大きすぎる期待は義則の心を知らず知らずのうちに追い詰めていたのだ。

ただでさえ地方大会を一人で投げぬいた義則の体は、疲労が溜まっていた上に、甲子園が決まってからの猛練習も重なって、義則の体の疲労は限界に達していた。

結局義則の学校は一回戦で敗退し、義則の甲子園の出場は叶わなかった。

自分の心を抑えることのできなかつた義則ももちろん後悔したが、このことに一番後悔したのは京子であった。なぜ義則の気持ちを分かってあげられなかつたのか、自分を責め続けた。

だからこそ、自分たちの子供を献身的に支え、高校球児にして、二人の甲子園出場の夢を叶えたかった。だから友樹が小学生になった時に、水泳をやりたいと言ったときは少なからず動揺した。

「トモ君、野球はねとっても面白いんだよ。野球をやっているお兄ちゃんたち、すごくカッコいいでしょ？」

京子はテレビで甲子園を友樹に見せながら何度もそう言って説得を試みた。しかし友樹の決心は京子が思っていたよりも堅かつた。友樹は京子が説得しても、あいまいに応え、取り合わなかつた。

結局京子は野球をやらせることをあきらめて、友樹を選手コースに入れた。

「この子はものすごい才能をもってる。きっとすごい選手になるよ。」

森コーチにそう言われる度に京子は喜びは感じたが、少し複雑な気持ちになった。

友樹が練習でいいタイムを出す度に、試合で活躍をする度に、野球をやっていたら...と思わずにはいられなかつた。

そんな京子の気持ちが吹っ切れたのは、友樹がJ0への出場を決めたときだった。

「お母さんやったよ。僕やったよ。」

満面の笑みで友樹が近づいてきた。水泳の練習がきつくて友樹の笑顔をしばらく見ていなかった京子は、その笑顔を見て、初めて水泳をやらせてよかったと思った。

そして、J0までの期間、またJ0が終わってからもずっと、水泳を続ける自分の息子を献身的に支えようと誓った。

友樹はお母さんの作ってくれたおにぎりを食べながら辰巳国際水泳場の観客席に座ってプールを眺めていた。いつも大会の時に隣に座っているはずの智紀は一行前の席でウイダーインゼリーを飲みながらぼーっとしている。

メドレーリレーのレースまではあと二時間以上ある。メドレーリレーだけに出場する先輩の健太と祐輔はまだ辰巳に来ていない。

本来なら同学年で、同じメドレーリレーチームのメンバーでもある智紀と仲良く雑談でもしたかった。。しかし今日の智紀には他人を寄せ付けない雰囲気があった。いや、今日だけではない。友樹がJ0の出場を決めてからもともと寡黙だった智紀はさらにしゃべらなくなり、友樹とも会った時にあいさつを交わす程度でほとんどしゃべらなくなった。

友樹は智紀のほうをじっと見つめた。目つきが少し鋭くなったかな。昔はすごく優しくそうな目をしていて仲良くしてたのに。友樹は今までの智紀との思い出を思い返していた。

「よう、友樹。ちーっす。」

友樹が振り返ると髪を濡らした健太が立っていた。その後ろには同じく髪を濡らして静かにプールを見つめる祐輔がいた。

「こんにちは。何してたんすか？」

「何って、アップに決まってるだろ。友樹はアップしなくていいのか？」

「いや、僕はまだ後でいいですよ。」

「後って友樹、もうレースまで三〇分もないぞ。」

祐輔の言葉に驚き、会場の時計を見ると既に三時半を過ぎている。レースは四時からの予定だ。知らぬ間に一時間以上もぼーっとしていたのだ。

友樹は周りを見渡した。大会も終盤に差し掛かり、個人種目もほとんどを終えたことで会場の人口は明らかに減っている。友樹はふと智紀のほうを見た。智紀はレースの招集に行くための準備をしているところだった。

「智紀、がん・・・」

「よっしゃー、智紀いくぞ。J0行こーぜ。アンカー頼んだからな。」

友樹が智紀に向けた声は、健太の言葉にかき消された。

友樹は心の中で健太に舌打ちしながらレースの準備を始めた。友樹は曇り止めを忘れたので、祐輔に借りて入念に塗った。その横では健太がいつも通り騒いでいる。今回は森コーチと毎週日曜日に放送されているアニメについて言い争いをしていた。次は主人公が死ぬんじゃないか。いや、それはあり得ない、あそこから逆襲するんだ。そんな余裕は残ってないよ。……。そんな今の友樹にはどうでもいい他愛もない話をしている。智紀と祐輔は友樹の横で静かに話している。しかし、友樹には心なしかいつも穏やかな智紀と祐輔が興奮しているように見えた。

友樹は立ち上がって、試合前のあいさつをしに森コーチの元へ向かった。いつの間にか森コーチと健太は仲良く談笑していた。祐輔と智紀も、友樹が森コーチのところに行ったのを見て集まってきた。その雰囲気気づいた二人も会話をやめ、健太は水泳道具を背負って立ち上がり、森コーチは誰のものかよくわからない無駄に大きいサインの書かれたバッグから資料を取り出した。

「準備はいいか。」

「大丈夫です。最高です。」

森コーチの問いに、周りを見向きもせずに健太が真っ先に応えた。

「他は大丈夫？」

その問いには誰も答えず、友樹、智紀、祐輔の三人は互いに顔を見合わせて、何度か自分に言い聞かせるように頷いた。

「健太はまずバックを三秒で入れよ。それから、祐輔のブレは…」

「うっす。」健太の大きな返事が聞こえたが森コーチは見向きもせずに続けた。

「出来れば三五秒を切って繋いでほしい。個人で三五秒台で泳いでるから頑張ればいけるはずだ。」

「はい。」静かに祐輔は頷いた。

「次に友樹、お前がこのチームのキーマンだ。二八秒台で繋いでくれ。個人のタイムよりは一秒近く速いタイムにはなるけど、お前なら絶対に出せる。」

森コーチが、祐輔や健太に語った時よりも明らかに力強く言ったことはそこにいた四人全員が気づいた。友樹は森コーチの顔をまっすぐに見つめて、力強く頷いた。

最後に森コーチは智紀の方を向いた。その時の目は友樹に対して向けたそれとは明らかに違っていた。

「智紀、今までやってきたことを信じろ。お前なら頑張れば二九秒で泳げる。私はお前を信じる。」

智紀はその言葉に何の熱意も感じなかった。恐らくそこにいた全員が感じただろう。森コーチは頑張って自分を鼓舞して、アドレナリンを出させようとしているが、森コーチが自分に関心がないことは明らかだった。

智紀は練習で二度二九秒台で泳いでいる。だから、森コーチに信じてもらわなくても、アドレナリンが出なくても、二九秒台で泳ぐ自信はある。森コーチは自分の普段の練習でのタイムすら忘

れている。恐らく二九秒という数字もメドレーリレーのJ0の標準記録である二分〇三秒から逆算して言ったに違いない。

智紀は森コーチの目を見ずに適当に頷いて立ち上がった。不思議と怒りや落胆はなかった。自分でも驚くほど落ち着いてレースに集中していた。智紀に続いて他の三人も立ち上がった。

智紀は必死に笑うのを堪えていた。

メドレーリレーの招集場ではお互いの性格、精神状態が手に取るようにわかる。

友樹は一言もしゃべらずに黙々とストレッチをしている。恐らく友樹は自分の気持ちをコントロールできて静かに燃えるタイプなんだろう。俺の予想は当たっていたな、と智紀は少し嬉しくなった。

祐輔は天井を見つめながらさっきから何かをずっと呟いている。智紀には全く聞き取れないよう

な声量ですっとぶつぶつ言っている祐輔は興奮を抑えられないようだ。祐輔は冷静を装いながら熱く燃える。これも智紀の予想通りだった。ぶつぶつ言っている祐輔から視線を外し、横を向くと一際そわそわした男がいた。

「ちょっと俺、トイレ行ってくるわ。」

健太は他のメンバーにそう伝えてキョロキョロ周りを気にしながらトイレに向かった。もう招集場に来てから五回目だ。智紀は、健太は凶太くて、無神経な奴だとずっと思っていた。その健太が今そわそわして三分に一回トイレに行っている。おかしくて仕方なかった。

健太は昔から気が強くなく、お母さんが大好きな心の優しい少年だった。

「健太、健太。」

大好きなお母さんが練習後の健太の元へと近づいてきた。健太はいつもこれが恥ずかしい。

確かにお母さんのことは大好きだが、中学校一年生の健太にとってはお母さんと仲がいいと周りに思われるのは恥ずかしかった。

「なんだよ。早く帰るぞ。」

いつも友達目を気にしてそう返事をしていた。コーチに注意をされても、やんちゃなふりをして誤魔化していた。

健太の母親は健太が生まれる前に離婚した。健太は一度も自分の父親を見たことがない。母親からの愛だけを受けて育った。だから健太は母親が大好きだった。幼稚園の工作でパラシュートを作った時や、かけっこで一番を取った時は真っ先に母親に報告して、自慢した。

「すごいね。ケンちゃんは。お母さんの自慢だよ。」

そう言われるのが何よりも嬉しかった。お母さんも健太を、たった一人の息子として、たった一人の家族として、大切に育てた。

そんなお母さんの悲しげな表情を健太が最初に見たのは小学校二年生の時だった。

以前からお母さんが夜、健太が寝てからベッドから起きて、リビングに二時間ぐらいいるのは知

っていた。しかし、仕事や食事の準備をしているのだろうと思い特に気にしていなかった。

ある夜、健太は就寝後にトイレに行きたくなった。しかし、母親がリビングにいる気配があったので、寝てなかったと思われるのではないかと感じ、トイレに行くのを躊躇った。

しかし、我慢の限界になってドアを開けると、うつむいて髪をぼさぼさにして涙を流す母親の姿があった。母親は慌てて涙を拭いた。

「あら、ケンちゃん寝てなかったの？悪い子ね、もう。」

明るく話しかけてきた母親の声は明らかに震えていた。

健太は、その時初めて母親の胸の奥にある深い闇を知った。そして、その時以来健太が笑顔を絶やすことはなかった。

「しゃあー」

ひととき大きな声が会場に響き渡った。その声に応えるように審判が笛を吹き終わる前の最後の歓声が巻き起こった。

声の主である健太はしきりに体をたたいている。体を奮い立たせようとしているのだろう。

興奮して抑えの利かなくなった心を必死にコントロールしようとしているのかもしれない。

「ピー」

審判の最後の笛が会場に鳴り響いた。喧騒で満たされていた会場は一気に静まり返った。

第一泳者の背泳ぎを泳ぐ選手が次々にプールに入った。健太は最後に胸を強く叩き、全選手中最後にプールに入った。怖いくらいに静かだった水が、ゆっくりと波を伝え始めた。

「パンツ」

スタートの合図が鳴った。電光掲示板には全選手のリアクションタイムが表示された。

健太のタイムは0.54だ。悪くはない。得意のバサロキックで周りから頭一つ抜け出ているのがスタート側から見てもわかる。25メートルのターンを1位で折り返したようだ。詳しいタイムはわからないが、恐らく13秒台で入っただろう。このままいけば31秒台で帰ってくるかもしれない。本当にJOに出られるかもしれない、そんな期待に胸を膨らませて智紀は服を脱いだ。

「31.50」

電光掲示板に健太のタイムが一番に表示された。0.5秒以上ベストを更新してきた。

プールサイドに上がった健太の体からは湯気が出ている。

「智紀、ハア、頼んだぞ。」

健太は智紀の横を通り過ぎる時そう言った。智紀はその時初めて健太の真剣な声を聞いた気がした。健太は智紀にそう言うと後ろのウッドデッキに倒れ込んだ。

智紀がプールの方に目をやると既に友樹がスタート台の上に立っていた。周りを見渡すとまだスタート台に立っていない選手もいるからどうやら祐輔は上位をキープしているようだ。

「1.06.01」

祐輔は二位で折り返した。

その時智紀は聞きなれない音を聞いた。

「ザっ、ゴン」

そんな音が智紀が電光掲示板を見た直後に確かに自分たちの泳ぐコースからした。

智紀はその音が気になり、スタート台の横からプールを見た。すると普段必ず十五メートルぎりぎりまでドルフィンキックをするはずの友樹が十メートル付近で水面にいた。

しかも二位で飛び込んだはずなのに既に六位ぐらいになっている。

その時智紀は確信した。

友樹は滑った。

そう確信したときなぜか智紀は自分の体からアドレナリンが出てくるのを感じた。

本当なら仲間の大きすぎる、重すぎる失態に落胆し、同情し、アドレナリンなんか出るはずがない。

智紀は自分の顔がにやけていることに気付いた。ひきつっていると思っていた自分の顔は自然と笑みに変わっていった。その時、智紀は自分が今抱いている気持ちの正体を知った。

それは、「喜び」だった。大きなチャンスに対する大きな喜びだ。

自分と同じ時期にクラブに入り、常に自分の前を歩いていた友樹。その友樹が今、水泳人生初めての失敗を味わっている。自分の失態に対する屈辱、仲間に迷惑をかけてしまったことに対する罪悪感。その両方に押しつぶされているかのようにもがき苦しむ友樹。

初めて自分が友樹の前に立っている。終盤に差し掛かり、激しくなる応援が別世界のものの

ように感じられた。智紀はスタート台に上った。今まで見たことがないくらい広いプール。

智紀の周りの世界は一瞬沈黙で包まれた。

「友樹、俺がお前をJ0に連れてってやるよ。」

智紀は勢いよくプールに飛び込んだ。

「イヤー、智紀。私はお前に一番期待していたんだよ。本当によくやったな。」

クラブの応援席に戻ると、すぐに森コーチが智紀に寄って行って頭をなでながら智紀を褒めはじめた。

「本当にお前はすごい。さすが私が目を付けただけはあるな。」

森コーチは本当に調子のいいことを言っている。智紀は喜びながらも少し迷惑そうだ。

つい数週間前までは自分の練習につきっきりで、いつも、

「友樹はうちのエースだからな。私もお前の練習に全力で付き合うよ。」

と自分に語り掛けていた。

しかし、そんなコーチは自分のたった一回の失敗、そしてライバルのたった一回の成功で簡単に掌を返した。

友樹がタッチをしたとき、電光掲示板に表示された記録は「1.36.23」だった。その記録がどういうことを意味するかは、プールサイドから電光掲示板を見る祐輔と、健太の横顔を見れば一目瞭然であった。

「絶望」二人の間にはそんな空気が流れていた。先輩二人は泳ぎ終わった友樹に声をかけることもせず電光掲示板をずっと眺めていた。それは、少なくとも希望に満ちた目ではなかった。何かにすぎるとような、そんな目だった。

友樹もその二人に話しかけることは出来ず、二人とは若干距離をとってウッドデッキに座った。他のクラブの泳ぎ終わった選手がアンカーを大きな声で応援しているのとは対照的に、三人はプールの方を見ずに静かに電光掲示板を眺めていた。

一位のチームがゴールをした。そのタイムは「1.57.64」。J0の標準タイムを優に切るものだった。二位、三位のチームも続々とゴールをした。友樹がタッチをしたときは七位だったから、友樹を含む三人は智紀が八位でゴールをするものだと思っていた。

智紀はそんな三人の「期待」を大きく上回って見せた。

祐輔と友樹は二人で帰る準備を始めていた。周りではゴールしたクラブの選手が抱き合っている。祐輔は惨めでプライドがズタズタになった。そこから早く離れたい一心で四人分の服をつかんだ。その時だった。

「よっしゃあー」

健太が奇声を上げて後ろから抱き付いてきた。祐輔は思わず服を落としてしまった。

「何すんだよ。ビチョビチョじゃねえかよ。ふざけんなよ。」

祐輔は健太を突き飛ばした。

しかし、今の健太の心はそんな祐輔の怒りなんか気にならないほど高揚していた。

「祐輔何言ってんだよ。電光掲示板見ろよ。」

「はあ？」

祐輔は電光掲示板に目を向けた。杉並SCの横に5という数字が表示されていた。しかしより驚くべきものはその隣に並んでいる数字だった。

「2.03.22」

それはJ0の標準タイムより約0.1秒速いものだった。祐輔は目を疑った。

智紀は練習の一番調子がいい時でも29秒0を切ったことがないはずだ。それが今日「26.99」のラップを刻んだ。

祐輔と健太は真っ先にプールから上がった智紀の元へ向かった。

友樹は智紀を囲む輪に入れなかった。友樹や智紀がしゃべったこともないような先輩やコーチも輪に加わり、智紀を褒め称えている。

友樹は一か月前の、自分がJ0を切った時のことを思い出した。その時は自分の両親も輪に加わっていた。今、自分の両親は輪の外で肩身を狭くしている。

友樹は悔しくて、悔しくて今にも叫び出しそうだった。自分が屈辱を味わうだけならまだ我慢はできた。自分の両親の、自分のことを一番期待してくれていた人の、期待を裏切った自分が許せなかった。両親をこれ以上絶対に悲しませることをしない。絶対にもう一度エースに戻ってやる。そして、両親を喜ばせたい…。

その時の友樹の気持ちは、友樹がJ0を切った時の智紀の気持ちに似ていた。しかし、その二つの気持ちには大きな相違点があった。

ライバルへの嫉妬。両親への感謝。「勝ちたい。」という気持ちは同じだが、それを生んだものは180度違った。

翌日の練習前の陸トレから、森コーチと友樹のマンツーマンの練習は、森コーチと友樹と智紀の三人での練習になっていた。健太も最近はその三人に加わって練習したり、先輩の練習に加わったりしている。

しかし、祐輔はそのどちらにも交われないでいた。健太や友樹や智紀は森コーチに将来を期待されている。その三人の中に交わる自信が祐輔にはなかった。先輩の中に交わるのも祐輔には荷が重かった。

祐輔は生まれてからずっと無口で控えめな少年だった。祐輔がこのスイミングクラブに移ってきたのは小学校三年生の時だった。以前通っていたスイミングクラブでの日々は耐え難いものだった。

同い年くらいの子供はほとんどいなくて、不良っぽい先輩がいっぱいた。コーチも不良っぽい人が多かった。そのため、先輩が祐輔をいじめていてもコーチは笑って許していた。

最初は先輩が小さい祐輔を珍しく思って、いじる程度だった。しかし、日が経つにつれてエスカレートしていった。

クラブに行けば先輩たちがプロレス技をかけてきた。「やめて。」と言ってもやめるどころか、むしろさらに喜んだ。コーチに怪我をしたと報告をしても、自己管理がなっていないと怒られた

。コーチまでもがグルになっていた。

そんな祐輔だからもちろん試合では一人ぼっちだった。いつもいじめてくる先輩たちも試合の時はさすがにいじめはしてこなかった。

そんな祐輔の才能をはじめに見出したのは森コーチだった。

「うちにこないか？」

そう森コーチに話しかけられた時、祐輔は初めて水泳をやっていてよかったと思った。

週七日、毎日練習してきた。週七日の総練習時間は二五時間で、五〇キロ以上泳いだ。

しかしその練習が身を結ぶことはなかった。いや、正確にはそのチャンスさえ与えられたことはなかったのかもしれない。そして、祐輔はそれをあきらめ、やめることもできないまま空虚な時間を過ごしていた。

だからこそ、そんな祐輔にとって森コーチの救いの手は嬉しくて仕方なかった。

そして祐輔は迷わず、森コーチの誘いを受け入れ、杉並スイミングクラブに移った。

杉並スイミングクラブに移ってからの祐輔は本当に水を得た魚のようだった。今まで感じたことのないような感じだった。練習をしても今までのように疲れてから急激にタイムが落ちることがなくなった。そして、何より、辛いときに声をかけてくれる仲間が、苦しいときに鼓舞してくれるコーチがいた。

「ありがとう」

いつもその言葉が胸の中にあった。

J0までの一か月はあっという間に過ぎ去っていった。祐輔も結局三人の陸トレには混ざらず、これといって特別なことをすることなく、いつも通りの毎日を過ごしていた。

健太も個人でJ0に出場することができなかった悔しさをリレーに全部ぶつけようと練習に打ち込んでいたが、それもいつもと特には変わらない光景だった。

友樹ももっとショックを引きずると思っていたが思っていたよりも図太く、すぐに切り替えていつも通りの練習にすぐ戻したみたいだ。

智紀も特に変わったところはない。強いて言うなら少し調子に乗り始めたかもしれない。今では、練習中にタメ語を使ってきたり、無理やり抜かしてきたりすることが多くなった。まあ、それも仕方ないことだと祐輔は諦めていた。メドレーリレーでJ0の標準記録を切った時から森コーチや他のコーチも智紀を特別扱いし始めた。つい数週間前まで友樹をエースと煽ってた人々も、すぐに智紀に乗り換えて智紀を持ち上げ始めていた。

そんないつもと変わらぬ日々が過ぎて、ついに大会開幕の前日となった。

四人はいつも通り朝練を終え、いつも通り他愛もない話を楽しんでいた。しかし、いつも先頭に立ってふざけ始め、盛り上げようとする健太がみんなと同じように椅子に座って冷静に会話をし、友樹と智紀の二人もその光景に違和感を感じる余裕がないようだ。

いや、むしろ大会前日に緊張していない自分が異常なのではないか。いや、自分は冷静なだけで、周りの三人がナイーブ過ぎるんだ。でも、こんなに冷静なまま試合に臨んだら、アドレナリンが出なくてベストで泳げないんじゃないか。いや、きっと大丈夫。明日になればきっと緊張するだろう。うん、きっと大丈夫。祐輔がそんな生産性のない無意味な自問自答を繰り返し、自分で勝手に安心していると、二階からスイミングクラブの創設者である一則コーチが下りてきた。

「君たちは、確か…。ああ、そうだ十一、十二歳のメドレーの子達か。」

「はい。明日J0に出ます。頑張ってきます。」

健太が敬語を使っている。祐輔は吹き出しそうになった。あいつ大丈夫かよ。ほんとに緊張してるな。明日やばいかもなあいつ。そんな心配をしていると、健太がその心配を助長させるようなことを言った。

「あの、何か御用ですか。」

これには祐輔だけでなく、友樹と智紀も笑いをこらえている。

「いや、このクラブには、J0で活躍した選手にご褒美としてお金をあげる文化があるんだけど、J0が終わってからしばらくここにいられないから今日渡そうかなと思って。」

祐輔は一瞬、コーチが何を言っているのか理解できなかった。やる前に褒美？ 確かに出るだけでもご褒美はもらえるらしいが、それをレース前にもらうということは、自分たちは出るだけで終わりだと思われていることになる。なんでそんなことを？ 祐輔にはコーチの言動が理解できなかった。ちなみに、ご褒美の金額は次の通りだ。

個人 出場 一〇〇〇円 決勝 十二〇〇〇円 メダル 十二〇〇〇円

優勝 五〇〇〇円

団体（一人当たり）出場 五〇〇円 決勝 十一五〇〇円 メダル 十二〇〇〇円

優勝 四〇〇〇円

つまり、個人種目で優勝すると一〇〇〇〇円、リレーで優勝すると八〇〇〇円をご褒美でもらうことができる。

祐輔はもちろん、コーチは一人一人に五〇〇円を配るものだと思っていた。

ああ、明日みんな士気が落ちちゃうだろうな。祐輔の気持ちはご褒美を渡される前からなえてしまっていた。

「よし、じゃあご褒美をあげようか。」

コーチが財布をポケットから取り出した。あれ？コーチが札を財布から出すのを見て祐輔は驚いた。コーチはそのまま一〇〇〇円札を八枚、財布の中から出した。コーチは自分たちが決勝に残ることを期待しているのだ。祐輔は一転、コーチが好きになった。しかし、次の瞬間、祐輔の

予想をはるかに超える「事件」が起こった。コーチはその八〇〇〇円を祐輔に握らせた。は？祐輔は一瞬、本当にそう口に出してしまいそうになった。祐輔はしばらく何が起こったのか理解できなかった。その間にも、コーチは次の人に八〇〇〇円を配っている。

「あの、コーチ、これは一人分ですか？」

「そりゃ、一人に渡しているんだから一人分に決まってるじゃないか。」

そう言ってコーチは鼻で笑った。いや、そういうことを聞いているんじゃない。なぜ一人に八〇〇〇円を渡しているのかということを知っているんだ。祐輔は少しイラつきながら、コーチに再度質問をした。

「いや、でも、コーチ、これは優勝した時の金額ですよ。」

「そうだよ。なに？優勝しないの？」

祐輔は、この人はおかしいんじゃないかと思った。確かに、今回の自分たちのエントリー順位は十六位だから、決勝に残ることを期待するならわかる。しかし、優勝となると話は別だ。J0の優勝なんて...。祐輔がそんな悲観的になっていると、コーチが上に行くところだった。他の三人が礼を言っている。祐輔も「ありがとうございました。」と言った。

コーチは手を振りながら二階へと消えていった。

大変なことになった。優勝しなければいけないなんて。これ以上はない緊張が祐輔を襲った。ついさっきまで緊張したいと思っていた自分を祐輔は恨んだ。もう、緊張なんてやだ。ああ、明日が明々後日になればな。祐輔の顔からはだんだんと血の気が引いていった。

朝六時の中央線車内で、智紀は昨日の出来事を思い返していた。自分たちはJ0に出るだけで喜んでいただけなのに、優勝を義務付けられている。と言っても、実際はたった一人が優勝を期待しているというありふれた状況ではあるのだが。大事な大会を控えた四人にはそう考える余裕はなかったようだ。智紀の緊張はピークに達していた。優勝を狙えるチームは大体いつも三～四チーム程ある。そして、決まってその三～四チームの優勝争いはアンカー勝負に委ねられる。つまり、このチームを優勝させるかさせないか、一則コーチの期待に応えるか、期待を裏切るかはすべて自分に掛かっている。別に誰もそうは思っていないのに、智紀は自ら、己に過度なプレッシャーを掛けていった。

智紀はそのプレッシャーを振り払うかのように無理やり笑ってみた。しかし、やはり人間というものには笑うと楽しいことを頭に思い浮かべるようだ。智紀は、昨日智紀が家に帰ってから、今日家を出るまでの母親の言動を思い出した。

「ちょっと、智紀、このお金どうしたのよ？まさか、拾ってきたの？」

息子が大事な大会の前に、激励としてもらってきたお金に対してこの親はなんてことを言うんだ。もっとまじなことを言えないのだろうか。智紀はあきれながら、応えた。

「ちげーよ。拾ったら家に持って帰るわけないじゃん。一則コーチに、褒美の前払いとしてもらったんだよ。」

智紀も自分で言っていて違和感を感じた。褒美の前払いってなんだよ。

「褒美の前払いって何よ。そんなことあるわけないでしょ。お母さんにはほんとのこと言いなさい。」

やはり、お母さんも同じ疑問を抱いたようだ。確かに褒美の前払いは常識で考えるとおかしい。しかし、今回の場合はそれが真実なのであり、それ以外の説明は智紀には思い浮かばなかった。

「智紀。ちゃんとお母さんの目を見てほんとのことを言いなさい。結果を出す前にもらうお金は、褒美じゃなくて、賄賂よ。」

お母さんもさっきからそんなことを言っている。もう自分でも何を言っているのかわかっていないのだろう。わけのわからないことを言っている。賄賂ってなんだよ。もう、どうしようもない。とりあえずこの場から逃げないと。

「まあ、いいじゃん。一則コーチがそれをくれたのは事実なんだから。じゃあ、俺明日早いから。よろしくね。」

そう言って智紀は自分の部屋に向かった。

次の日朝五時に智紀が起きたら、母親はまだ寝ていた。智紀が母親の部屋に入って声をかけると、今まで眠っていた人とは思えないスピードで目を覚ました。いつものことだ、と智紀はあきれていた。しかし、母親が智紀をリラックスさせるためにわざとやっているということには気づいていない。

「お母さん、お弁当は作ってある？」

「あら、作ってあるわけじゃない。今起きたばかりなのよ。」

智紀は朝から頭を抱えた。そういうことを言っているのではない。自分は早く作って、と催促し

ているんだ。

「早くお弁当作っちゃってよ。六時前には出るからね。」

智紀はウイダーインゼリーを飲みながら催促した。

「はいはい、わかったわよ。何入れればいい？サンドウィッチ？おにぎり？」

朝から智紀のイライラは募るばかりだ。この人は本当にスイマーの親なのだろうか。まあ、確かにまだ自分はスイマーと呼ぶには早いかもしれないが。どちらにしろ、大会の日にサンドウィッチはあり得ない。米に決まっている。

「サンドウィッチな訳ないだろ。訳わかんないこと言ってないで早く作ってよ。」

言ってから、ちょっと強く言い過ぎたかな、と思ってお母さんの方を見ると、案の定ふてくされていた。なによ、せっかく冗談を言って楽しませようと思ったのに、とでも言いたげだ。しかし、今の智紀には、そんな冗談に乗るほどの気持ちの余裕がない。智紀はお弁当ができるのを待ちながら、準備を始めた。その後二人とも一言も発さずにしばらく時間が過ぎた。

智紀が時計を見ると時刻は五時四十五分になっていた。智紀は慌ててお母さんを見た。

「お母さん、まだ？」

「もう出来たわよ。もう行くの？」

「うん、行くよ。」

「そう、行ってらっしゃい。お母さんも後で見に行くかもしれないからね。」

いや、来いよ。そう心の中で言って、智紀は家を出た。

「おい、智紀、聞いてんの？」

森コーチに叱られた智紀は我に返った。もうすでに辰巳国際水泳場の中に入っていた。友樹、

祐輔、健太の三人が智紀の方を心配そうに見ていた。

「おい、智紀、緊張してんのか。情けない奴だな。」

健太がからかうような目を向けてきた。昨日一番緊張して情けなかったのは誰だよ。他の三人全員がそう心の中で思っていると、森コーチが真剣な声で話を始めた。

「まあ、いいや。みんな集中して聞けよ。お前らは今までたくさん練習してきた。練習量ならどこのクラブチームにも負けていない。自信を持て。よし、胸を張って行って来い。」

本当ならばここで四人そろって大きな声を出して感動的な出陣式になるはずだったが、四人は恥ずかしさでうつむいた。というのも、今は午前八時で、さっき開場が始まったばかりだ。アップに向かうために通路を歩いている人がこっちを見ては笑っている。四人は恥ずかしさに耐えられなくなり、森コーチから逃げるようにアップ用のサブプールに向かった。

サブプールに着いた四人は目の前の光景に驚愕した。確かに東京都の大会でもそれなりに混んで、自由に泳ぐことは出来ない。しかし、今日のサブプールの光景は異常だった。

プールの中に、スタートを待つ人の二十五メートル程の列が一つのコースあたり二つできていた。つまり、続けて泳ぐことができるのは二十五メートルだけである。四人は大会会場のメインプールで泳ごうとも考えたがそこも既に同じ状況になっていた。四人は諦めてサブプールでアップをすることにした。

「やべーな。J0ってこんなに人がいるんだな。みんな速そうだな。」

「健太、周りを気にするな。雰囲気呑まれるなって言われただろ。」

弱気な発言をした健太に対して、祐輔が忠告した。

「いや、でもさ、俺ら優勝しなきゃいけないんだぜ。やべーな、やっぱり。」

なんだよ、やっぱり緊張してんじゃないですか。智紀は口から出そうになったその言葉を、必死に呑み込んだ。

「まあ、とりあえず早くアップしようぜ。」

そう言ってプールに入っていく祐輔を、他の三人は遅れまいと追いかけた。

午前十一時、四人は男子十一、十二歳メドレーリレーの招集場にいた。招集場もサブプールと同様に普段の大会とは違う雰囲気だった。訛りのある言語を話している選手がたくさんいる。レースに臨む前に森コーチには、周りにめずらしいものがあると思うな、いつも通りやれと言われたがそれはどうやら無理そうだ。健太は切実にそう思った。そして、東京都の大会では自分たちが占領している定位置が他県のチームに占領されているのを確認して端っこに座った。

「あー、緊張すんな。やっぱJOは違うよな。」

「おいおい健太、何弱気になってんだよ。一泳なんだからしっかりしてくれよ。」

「弱気になんてなってねえよ。緊張するって言っただけだろ。うるせえんだよ、祐輔は。」

「うるせえってなんだよ。お前みたいな...」

「まあまあまあまあ、落ち着きましょう、二人とも。」

友樹が間に入った。

「もうすぐ呼ばれますよ。役員の近くに行きましょう。」

前に行くと杉並スイミングクラブの泳ぐ一個前、つまり最終組の一個前を呼んでいた。最終組ひとつ前の組を呼び終えた後、役員はレースの状況を確認した。そして、直後に始まったレースのトップのチームが一〇〇メートルの引継ぎを終えたのを確認して、最終組を呼び始めた。

「一コース、...」

速そうな選手たちが待機所に入っていった。その後も順々に選手が入っていく。

「五コース、高崎スイミングクラブ」

エントリートップのチームだ。全員速いな。健太はそう確信した。

「八コース、杉並スイミングクラブ」

「はいっ」

健太が今までのどのチームよりも大きな返事をした。そして、杉並スイミングクラブの選手たちは健太を先頭に待機所に入った。

待機所は思いのほか静かだった。東京都の大会ではお互いに調子やタイムを聞きあって和気藹々としているが、やはり全国大会となるとやはり、お互いの顔を窺って誰も他のチームに話しかけようとはしない。静かだと余計に緊張が募ってしまう。健太は思い切って、五コースの高崎スイミングクラブの一泳に話しかけた。

「ねえねえ、ベスト何秒？」

緊張した空気を打破するためになれなれしく話しかけた。すると、誰だよお前はと

言わんばかりの鋭い視線を健太に向けてきた。

「八秒くらいですけど。君は何秒なの？」

「あ、えっと、一秒です。」

「あ、そう。頑張ってるね。」

ぼこぼこにされて自陣に戻ってきた健太を他の三人は必死で励ました。

「健太、落ち込むことはないぞ。お前の方が遅くて当たり前だ。」

友樹と智紀は後ろで頭を抱えた。そうじゃないだろ。今日の言動から推察するにどうやら祐輔は意外と無神経な人のようだ。祐輔が健太の傷を抉っていると、役員から合図があった。

「二泳と四泳の選手は向うに移動してください。」

それを聞くと、各チームの二泳と四泳は一泳と三泳に一声二声かけて歩いていった。祐輔と智紀は最後に友樹と智紀に声をかけて歩いていった。人数が半分になった待機所で喋るものはだれもいなかった。そして、刻一刻と杉並スイミングクラブの運命の瞬間が近づいていた。

「いやー、お前らすごいぞ。何があった？」

「いやー、コーチ、僕はいわゆる天才なんですよ。」

こいつの待機所での言動をビデオに収めて見せてやりたい。智紀は本気でそう思った。

「まあまあ、とりあえず全員毛布でゆっくり休め。まだ時間は十分あるから眠ってもいいぞ。昼食は私が買ってきてやるから。ん？何が食べたい？何もリクエストないのか。じゃあ私が選んで全員分買ってきてやるからな。じゃあな。お前ら寝ていろよ。」

四人は顔を見合わせた。自然と全員の顔から笑みがこぼれた。ここにいるのは日本一のチームなんだ。そう思うと誇らしくて仕方なかった。

「2.00.28」それが杉並スイミングクラブのタイムだった。健太のタイムは「30.70」祐輔のタイムは「33.49」友樹は「28.87」智紀は「27.85」だった。J0の予選一位通過。全員がベストを出した結果だった。

智紀が起きると決勝二時間前になっていた。少し人が減り、会場内も少し涼しくなっていた。森コーチのコンビニ袋の中にはおにぎりとそうめんしか入っていなかった。昼食はそうめんとおにぎりで済ませた。智紀は一人でアップに行った。

智紀がゆっくりとアップをしてから帰ってきて、プールをぼーっと見ながらカロリーメイトを食べていると決勝三〇分前になっていた。四人は準備をしてサブプールに集合した。健太、祐輔、智紀、友樹の四人は森コーチを囲むように円になった。

「お前らよくここまで来てくれたな。正直ここまで来れるとは私は一度も思わなかった。今まで、私はお前らを指導してきた。でも今は、...私を日本のトップに連れて行ってくれ。頼んだぞ。」

四人は力強く頷いて、健太を先頭にして招集場に入った。

そこからのできごとを智紀はよく覚えていない。順位は四位だったようだ。友樹がレース後に泣きじゃくっていた。友樹のせいで負けたと祐輔が言っていた。どうやら友樹が引継ぎの時に足を滑らせたようだ。予選と同じタイムだったら優勝できた。そう言って森コーチは泣いていた。健太は放心状態で荷物が溢れていて閉まりようのないバックのチャックをずっと引っ張っていた。

智紀が四日後にクラブの練習に行くと誰もいなかった。健太と祐輔はやめたみたいだ。友樹は何をしているのかさえ分からない状態だそうだ。

インターハイ決勝で一位になり表彰台の一番高い所に立って笑っている智紀を友樹はじっと見た。そして自然と涙があふれてきた。

「一緒にそこに立ちたかった。でも、ありがとう。僕らの夢を叶えてくれて。」

